



調教施設

女体代

エルトリア

Illustrator

西陽ミツバ 朱兎栗いむ



聖華文庫



第一話 女体化ナノマシン

どれくらい、歩かされただろうか。

ただ靴の鳴る無機質な足音だけが、アルフの耳に反響していた。

逃げようにも両手には分厚い手錠が嵌められ、両脇は屈強な兵士の男二人に挟まれている。何より視界は目隠しによって真っ暗で、結局逃げ場はどこにも無かった。

「止まれ」

「っ……」

強い口調で命じられ、アルフは唇を噛み締めながらも立ち止まる。伸びてきた手によって、目を覆っていた目隠しが外された。急に瞼に差し込んできた光に、思わずアルフは目を細める。

「う……」

程なくして、白んだ視界が戻ってくる。目の前には恰幅が良く、豪華な軍服を着た男が立っていた。階級も相当高いのだろう。

男は拘束されたアルフを舐めるように見回し、ニンマリと笑う。

「これはこれは、まさか本当にかの有名なアルフ様が来て下さるとは。報告が入った時、初めは誤報かと思いましたが……うちの兵士は本当に優秀だ」

「御託は良い。ここはどこだ。本当にアウライ帝国なのか？」

そう目の前の男を睨みつけながらも、アルフは内心では敵国アウライに敗北したことを

酷く屈辱的に思っていた。

大国ロタール連邦の軍に所属するアルフ・エーベルバッハは、今宵も長年戦争をしている敵国アウライ帝国に、出撃していた。

突如として銀髪紫眼のアウライ人による世界侵略が始まり、それに対抗するべく結成されたのが、アルフの属する多民族率いるロタール連邦だった。

少佐を冠するアルフは、今回の侵攻で非常に重要な役割を担っており、ロタール連邦にとっても転機となる作戦

だが今回、軍も予期せぬ事態によって基地が大規模な襲撃を受け、気付いた時にはアルフは敵の手に落ちていた。

「アルフ様の噂はかねがね聞いていましたぞ。軍に所属してからたった四年で少佐へとの上がった、天才だとか。実際、あのロタールの防壁を割るのは本当に苦労しましたからなあ」

「そんなことを私に聞かせてどうなる？ 言わせてもらおうと、私を拷問しても何も有益な情報は得られない。大人しくさっさと殺すことだな」

「まさか、殺すだなんて。そのような勿体ないことをするわけが無いでしょう！」

胡散臭い言葉に眉根を寄せるアルフだったが、男は笑みを深めただけだ。

「不思議そうな顔ですねえ。説明するのもなんですし、実際にその目で確認してもらいましょうか。とても有意義な『使い道』をね」

「ぐっ……」

軍服の男が目線で合図をすると、アルフの両隣に立っていた兵士が強引にアルフの肩を掴む。無理やり歩かされ始め、アルフは痛みに舌打ちをした。

先程の太った男もそうだが、両側を挟む男の白い軍服が光で反射して不愉快だ。ロターの緑を基調とした服とは違い、眩しくて仕方がない。

（使い道、だと……？ どういう意味だろうか）

牢屋行きになるのか、それとも拷問されるのか。覚悟していたアルフだったが、長い舗装された廊下を歩かされる彼が連れてこられたのは、非常に大きな鉄製の扉を構える部屋だった。天井も一気に高くなり、廊下の広さも格段に上がる。

扉の上には、特別調教施設と記された札が貼られていた。

兵士の一人が扉の右端に設置された電子パネルにカードキーを読み込ませれば、軋んだ音を立てて鉄の扉が開いていく。

（なんだ、この施設は……？ 報告には無い施設だ）

中は大量の機械や培養カプセルが並んだ部屋で、大仰な研究所にアルフはかすかに目を見開く。

様々な技術人が集結するロターの化学に対し、アウライ帝国は兵器に関しては非常に高い技術水準を保持していた。そのため拮抗する戦力から、両国は数世紀にも渡って戦争を続ける事となった。アウライ帝国が水面下で様々な研究を行っていることはアルフも知っていたが、報告には無かった技術を目の当たりにし、驚愕する。

（このカプセルは何に使うつもりだ？ 軍事用には見受けられないが……。そもそも、これは兵器なのか？）

脱走した際に出来るだけ本国に有力な情報を持って帰られるよう、アルフは歩きながらも静かに辺りの様子を探る。

（それに調教、とはどういう意味だ。洗脳でもしているのか？）

部屋の奥に歩かされて行く内に、中は水で満たされた沢山の細長い透明な培養カプセルが左右に立ち並び始める。やがて部屋の一番奥に辿り着き、前方を歩く小太りの男も足を止めた。

「着きましたね」

「は……!？」

アルフも前方に視線を戻したが、目前に広がった光景に言葉を失う。

大量の円形の水槽のようなものが等間隔に並んでおり、さらに培養カプセル内のいくつかには既に緑色を基調とした軍服を着た人間——ロタールの兵士が液体の中でたゆたっていた。

「なんだこれは……!」

「クク……説明せずとも、すぐにこれの効果は実感することになるでしょうね。もちろん、その体をもってしてね」

「冗談ではない!」

アルフはさっと青ざめる。さらに前方の空の培養カプセルのひとつが音を立てて開き、アルフは引きずられるようにしてそこに連れていかれる。

「っや、やめろ! 離せっ!」

そんな得体の知れない物の中に、入れられる訳には行かない。暴れるアルフだが、すぐ

に屈強な男に両側をがちりと抑えられる。全力で足掻くも培養カプセルの中の拘束具に四肢を固定され、やがて重い音を立てて透明な扉は閉まってしまう。

「くそっ、開けないか！ 私を今すぐここから出せー！」

アルフは顔を蒼白にしながら、固定具をガタガタと揺さぶって叫んだ。

「当国が誇る技術の結晶である、生体ナノマシンです。稼働が終わったあとが楽しみですなあ」

男は全く取り合わず、湿った笑みを浮かべて口角を吊り上げる。

すぐにアルフの足元からは、ゴポゴポと水が音を立てて溢れ始めた。

「くっ……」

身体が水に沈んでいくと同時に耐え難い眠気が込み上げ、アルフはそのまま意識を失った。

ゴポゴポとナノマシンを含む水が抜かれていくと同時に、カプセルの扉が開く音でアルフは目を覚ました。

「ん……」

ぼんやりとした思考で、アルフは閉じていた目を開く。

身体を拘束していた固定具が外れ、アルフはふらふらと開いたカプセルの扉を跨いで外に出た。

外の新鮮な空気が心地よく、ひとつ深呼吸をする。

気分はそこまで悪くないものの、何故か酷い違和感が拭えない。大切なものを取りこぼしてしまったような、悪寒が酷かった。

「なんだ……？」

朦朧とした頭を上げたところで、急に隣から悲痛な女性の悲鳴が聞こえた。

「どうなってるんだよこれ！」

「……！！？」

弾かれたように声の方を振り返れば、全裸の若い少女がわなわなと震えて叫んでいた。なだらかな銀髪に紫色の宝石のような瞳。紛れもなく、アウライ人だ。

（何故、ここにアウライ人がいる？）

その横を見れば他にも若いアウライ人の少女らが複数人、全裸でへたり込んでいた。その光景に、アルフは培養カプセルに入れられる前の記憶を思い出す。

培養カプセルは全て開いており、たゆたっていたはずのロタールの男性らは一人も居ない。

「まさか……！！」

ハッとアルフは確信する。慌ててもたついた足取りで、自分の出てきたカプセルに駆け寄った。

「これが……わ、私の身体なのか……！！？」

ガラス製のカプセルに手について覗き込むと、十四歳ほどの年若いアウライ人しか言えない容貌をした女性が映り込む。

自分が片手をあげれば、鏡の中のアウライ人も片手を上げる。

「ど……どういふ事だ……」

鍛え抜かれた胸板があつたはずの胸部に触れば、小さいとはいえ女性の胸の感触が返ってくる。

シヨックのあまりその場に座り込みそうになるアルフだが、彼の誇りとプライドが許さなかつた。

呆然とした空気が広がる中で、場を間断するように悪趣味な笑いが聞こえてくる。

「どうやら全員、上手くいっただようですねえ。どれもこれも、見事な雌になつたようであつたです」

知らぬ間に目の前に立っていた例の軍服男は、全員の顔を見回しながら拍手する。座り込んでいたアウライ人達も皆弾かれたように立ち上がり、口々に男を痛罵した。

「お前は……!!」

「ふざけるな、一体なんなんだよこれ!!」

「なんで俺たち、女になつてるんだ!」

だが男は何処吹く風と言つた様子で肩を竦める。

「ふざけるなも何も、これが我々の技術です。生意気で誇りだけは無駄に高いロタールの人間を、決して我々に逆らえない雌へと調教する。それが『ロタール女体化計画』だ」

想像以上に悪趣味な施設に、アルフは絶句させられる。ナノマシンだけでなく男をアウライ人にするというその技術は、国内はおろか全世界中を出し抜くほどの技術力だ。

いかに彼らが本気でこの計画に力を入れているか否応にも理解し、アルフは背筋が寒くなるのを感じた。

「大尉」

パンパン、と男が手を叩いた途端、どこからともなく見たことの無い男が現れる。中年で中佐の男とは違い、突然現れた白軍服を纏った男はまだ若く二十代前半にも見えた。

「はっ。ただ今参りました」

「ええ。これらが貴方の新しく担当する『雌』ですよ。たっぷりと仕込んであげて下さいねえ」

「誰が雌だ！」

いくら女性にされてしまったとはいえ、雌と言われてアルフは顔を真っ赤にして噛み付く。

「この『雌』は優秀だが特に反抗的です。貴方にもびったりだと思ひましてね。しっかりと教育してくださいねえ」

「なるほど……承知しました」

中佐はねっとりとした視線をアルフに向け、笑みを浮かべて足音を立てながらあっさりと去っていった。

その場には白軍服の男と、戸惑いを隠せないアルフだけが残される。

（二人なら……いや、今逃げるのは無理そうだな）

一瞬、脱走の二文字がアルフの脳をかすめるが、直ぐに首を振る。

大尉と呼ばれた男は、身長も高く鍛え抜かれた体格をしていた。少女にされてしまった今、不意を突かなければまず筋力差では勝てないだろう。

（それにまだ、この施設の間取りを理解していないしな）

反抗的な態度を見せれば、拘束を強められる可能性もある。じっくりと計画を練らなければとアルフは思案した。実際この場の少女達も、ここで男に抗ったとして適わないと自覚しているのだろう。誰もが剣呑な視線で、大尉と呼ばれた男を睥睨する。

男は腕を組みながら、アルフらを見回した。

「見てのとおり、このナノマシンを注入されればどんな男もアウライ人の雌になる。凄いだろ？ アウライ帝国の化学の集大成だ。もつともその効果は、貴様らの体でよく実感してるみたいだなあ？」

「こんなことを認められるわけがないだろう！ 早く私たちを元の体に戻さないか！」
アルフの抗する言葉も、男は鼻で笑って一蹴する。

「元の姿に戻すだと？ 捕虜の分際で楯突くとは良い度胸だな。自分の立場がわかってい
るのか？」

「くっ……」

「俺の言うことを大人しく聞いていれば、お前らの安全は保証してやる。まあ、お前らはこれから逃げようにも逃げられなくなるからな。——このナノマシンで女体化した人間はなあ、食事ではなく精液でしか栄養を摂取出来なくなっていくんだよ」

「は……！？」

「何だって……？」

それまでがなっていた少女たちが、一斉に黙り込む。愕然とした空気が広がった。

「ナノマシンで性転換したお前らもこれから、ザーメンで食事を摂るようになるんだ。それ以外は開発される毎に、段々身体が何も受け付けなくなっていくんだ」

（な、何の冗談だ……！）

言葉の意味を理解し、アルフはゾッと肝を冷やした。

何より元は同じ男ということもあり、想像するだけで背筋が凍りつく。

アウライ帝国もロタール連邦も深刻な女性、ひいては人手不足ではあったが、まさか裏で人権の無い捕虜に非情な実験をしていたとは。

他の少女らも、顔色を赤くしたり青くしたりと絶句していた。男は大袈裟に腕を組みなおし、わざとらしい仕草でアルフらの顔を交互に見やる。

「お前ら傲慢で反抗的なロタールの奴らをどうすれば従えることが出来るか……上の偉い奴らの出した答えが、お前らの今の姿だよ。無駄に忠誠のお高い貴様らを全員、それも最も有効的に利用し尽くせる方法でな。これから貴様らは漏れなく、アウライ帝国にとって必要な駒として働いていくんだ。素晴らしいだろう？」

全員が何も言えなくなったところで、男はゆったりと言葉を続けた。

「お前らの体には、注入されたナノマシンが今も滞在している。良いか？ お前らはもう、俺たちアウライ帝国の所有物なんだ。抵抗なぞ無意味な考えは持たないことだな。貴様らの命は俺が握っている。お前ら雌は俺たちのため、これから忠実な奴隷に生まれ変わるんだよ」

男から女へと変えられただけでなく、さらに徐々に開発が進む事に精液でしか生きられない体になるという。思った以上に最悪の状況に、アルフは危機感を募らせた。

（雌奴隷だと……冗談ではない！ 何て悍ましい考えを思いつくのか、アウライは……！ 今の話が本当だとしたら、余計なことをされる前に早く脱出しなければ……）

そつと調教師と囚われた仲間らに視線を向け、唇を噛み締める。

（まさか捕虜を、性別を変えて繁殖のために利用していたとは……アウライ人は我々を心のない人間だと言うが、これではどっちが悪魔だか……）

調教師を名乗る男が嘘を着いているとは到底思えない。すなわち脱出が遅れれば遅れるほど、逃げ出す可能性はより低くなっていく。悪辣で非人道的なアウライ帝国の実験に、盛大な嫌悪感を抱いた。

反論出来なくなった少女たちに満足した調教師は、捕らえた囚人情報の登録したパネルを眼前に表示し、淡々と業務をこなし始めた。

「これからは貴様らを番号で呼ぶ。一度しか言わない故、忘れないように。こちらの要求を拒否したり、歯向かった者には厳罰を与える」

調教師は指で宙に浮いたパネルをスライドさせながら、淡々と業務を進めていく。

「お前の番号は084だ」

左から順に少女に向かって指を指し、調教師の男は番号を告げた。

「お前は囚人番号087、お前は088……お前は089だ。忘れるな」

089のところで自分を指さされ、アルフは身体を震わせた。

「っ……」

「なんだ？ 089、言いたいことがあるのか」

「……いえ」

首を振って視線を逸らしたアルフに、調教師は鼻を鳴らす。

「ふん、それなら良いがな」

男が番号を振り終わったところで、顔を隠した兵士が台車でガラガラと何かを運んでくる。

調教師はそれを横目で確認すると、装着していた金の首輪に手を当ててアルフらに命じた。

『着替えろ』

「っ!？」

男がそう言葉を発した途端、アルフの体は彼の支配下を離れてひとりでに動き出す。どうしてか勝手に、男に命じられたとおりに台車に置かれていた服を手に取り、着替え始めていた。

（何だ、体が勝手に……っ）

アルフは酷く戸惑う。止めようとしても肉体は自分の意思では動かず、命令には逆らえない。一切口ごたえ出来ずに、ただ用意された衣服に着替えることに身体は集中していた。視線だけ何とか真横へと移せば、座り込んでいたはずの少女達も、立ち上がって男の命令通りにスーツに着替えている。

（あの首輪の仕掛け、捕虜を操ることが出来るのか!? そこまでアウライ帝国の技術は進歩していたのか……なんという事だ）

条件はあるのだろうか、捕虜の肉体から自我が離れて命令通りに動かせるという科学力に、アルフは動揺を禁じ得ない。

（不味いな…逃走経路を確保するだけでなく、どうやって命令を阻止できるか。何かからくりはあるはずなんだが）

想像以上に立場の悪い現状と、逃走の難しさに焦りを覚えそうになった。その間も自分の手はひとりでにスーツを来ており、やがて装着し終える。

用意されたスーツはラバー製のもので、ぴったりと隙間なく身体に張り付いてきた。あらかじめ肉体を採寸していたというよりは、ロタール人を少女にする際の体付きや身長が一律に定められているのだろう。見ればこの場にいる少女全員が、同じような背丈と体つきだ。

愛玩動物のようだな、とアルフは心の中で吐き捨てる。

「全員着替えたか。番号順に並んで歩け」

少女たちに視線を一巡させて全員が衣服を着衣したのを確認した調教師は、背を向けて歩き始める。少女らもどこか生気の無い様子で、調教師の後に続き始めた。

いきなり少女へと変えられ、説明を聞いてとても正気ではいられなかったのだろう。アルフはぼんやりとした彼女達の表情を見据えながら、硬く脱走することを誓った。

第二話 調教スーツ

アルフらが通されたのは、ずらりと左右の壁に扉の並んだ廊下だった。扉の上には番号が表示されており、捕虜一人ごとに部屋が割り当てられているらしい。

「ここがお前たちの部屋だ」

アルフは調教師の様子を密かに伺い、089と表示された部屋へと入る。また部屋の扉の真横には、一つ一つカードキーをかざすような機械が付けられていた。

入るのは自由だが、部屋を出るのにはカードキーが必要らしい。

（厄介だな……）

その後は一人ずつ雑用の兵士から簡単な食事を配られ、自由時間が与えられた。

「随分と温い警備だな」

一時間も用意された休憩時間に、驚きを通り越してアルフはあきれ果てる。それほど、絶対に逃げられないという自信があるのだろうか。

（舐められたものだな……逆にじっくりと有効活用させて貰うか）

部屋にはベッドとテーブル、トイレと最低限必要なもの以外は何も無く、使えそうなものは見受けられなかった。とはいえ時間はたっぷりとある。

どうしてか、部屋にはシャワーもないというのに排水溝が設置されていた。休息を取るためのベッドも置かれているというのに、水周りに関するものが設置されているのはあまりに不自然だ。

「ん……」

そう思ったところで何かがアルフを揺らす。

「なんだ……誰だ!？」

不意に全身にぞわっと違和感を感じ、弾かれたようにアルフは立ち上がる。

「は……一体、何が起こって……」

視線を下げれば、ひとりでにスーツが、胸周りと股間を中心に震え始めていた。驚きの表情を浮かべたアルフだったが、次第にその顔が崩れていく。

「くっ、ふ……!？」

その際にいつも股間にぶら下がっていたものが消滅していること、自分が本当に女性に変えられてしまったのだということを、否応にも知らしめられる。

「っあ……は……何だ、これはっ……!スーツが動いている、のか……!？」

ぴったりと皮膚に張り付いてきたスーツは、そのまま小刻みに揺れる。

一度も触ったことの無い乳首を振動させられ、くすぐったさが湧き上がる。

「くっ、アウライ人め……悪趣味なものを開発して……!!」

道理でやたらと長い自由時間を設定されているわけだ、アルフは遅ればせながら理解した。このために、わざわざ一時間もの猶予が与えられていたのだ。決して休憩を取らせるわけではなく、スーツに責められ調教される

スーツが動く毎に直接揺れがダイレクトに伝わってきて、アルフはふらついた。

「くそっ、この……やめろっ、揺らすな、気色悪い! そんな所を弄り回して何になる……!!」

特に、両乳首を集中的にこね回される。最初の方こそ違和感しかなかったが、なんとも

言い難い痺れが腰から生まれ始めた。

「あっ……ふう……これは……」

縮こまっていた乳首をギュッギュッと押され、引っ張りあげて乳輪をくすぐるようにさすさと可愛がってくる。しゅるりとスーツに周りを囲われ、紐を引っ掛けるかのように強く巻き付かれて上向きに引っ張られ、アルフは甘く呻いた。

繰り返されていくうちに、刺激される乳首は首をもたげて大きくしこっていく。

さらに生き物のように蠢くスーツがそこを食い締め、堪らずアルフは肩を跳ね上げた。息が上がっていき、ぞわぞわとした刺激が少しずつ大きくなっていった。

（な、何だこの感覚は……こんなの知らないっ……！）

鳥肌が立つほどの刺激だと自覚したアルフは、息を飲んだ。

「これが、女の快感とでも言うのか……？」

男とはまた違い、乳首を擦り立てられる度に疼きのような感覚がせり上がってくる。堪らず、アルフは唇を固く噛んだ。この部屋も監視されているかもしれない。みつともない真似を見せたくはなかった。

「やめろっ……う、そうだ……このスーツが原因なら……！」

ようやくスーツを脱がしてしまえば良い、という発想に至ったアルフはスーツのチャックに手を伸ばす。だが

「くう、何故だ、何故脱げないんだっ……！！うっ」

スーツを掴んで流動を妨害しようと画策したアルフだったが、女性の力ではすぐに弾かれてしまう。

薄くも伸縮性に富んだスーツは、自在に動きながら乳首をキュッと握る。

「ひ、ひ、ううっ……!!」

快感を拾ってはいけない、ここで沈めば後は溺れるだけで戻れなくなる。そう痛いほど頭では分かっている。だというのに、ねつとりと反則的な手巧で摩擦されれば簡単に、その忍耐も崩れてしまう。

強く膨らんだ乳首と、尖りぷつくりと濃い桃色に色付いたクリトリスを吸い上げられて悶絶する。

「っはあ、あ、あああっ！あああっ……やめっ、声、抑えられないっ……！うっ、あああ！！」

ズリズルズリズリ、と奥地から浅い所まで隙間も逃がさずに削られてしまうと、腰が浮いて尻が跳ねる。

「うっ、ひ、ひぐっ、やうああっ！」

桃色に色付いた乳首を押しつぶされ、引き伸ばされた後は敏感なそこを絶妙な力加減で、リズム良くトントンと再度押し込まれる。

「うっ、くうう……」

形がくつきりと乳頭を強く挟んだまま、スーツは布地の中でめちやくちやに捏ねる。アルフの肩が幾度も跳ね、思考を食い荒らされる。

スーツは股周りと乳首をクリクリとそれぞれ包み込みながら絶妙に動き、激しい性感が理性を溶かしていった。

「くうう、ふうっ……！あっ、はふっ、うう……！！」

乳首を高速で弾かれて、アルフの身体が仰け反ると同時に、鼻にかかるような甘やかな声が溢れる。

「ひゃううつ、うつ、やああっ……！」

スーツだというのに濡れた音を立てて、よりきつめに股間にも吸い付いてくる。

お前は雌なのだと言わんばかりに、女としての快感をアルフに刻み込む。

「はっ、こんな……私がっ……！！！」

股間と乳首をクリクリとさざめくスーツに擦られ、体から力が抜けていく。またビクンと背筋を痙攣させたアルフは、ついに立つことさえままなくなってしまう。

「ふああ……あっ、ふうう……ただの胸だと言うのに……こんなところで感じるなんて、屈辱だ……！」

心では悔しいだけのはずなのに、身体は確実に感じている。

その場にへたり込み、アルフは熱い息を吐き出しながら真っ赤な顔で見悶える。

「屈してたまるか……！！！」

スーツを脱ごうと背中中に手を回しても、指がジッパーの上を虚しく滑るだけだ。どうしてか、自分の力ではジッパーを引き下ろすことが出来なかった。

「んっ、あああっ！ そっ、そこばかりい……！」

その間もねっとり乳首を責めこまれ、身体から力が抜けてしまう。何か、どうにかして現状を打開する術はないか。緩やかに刺激されていた、股間への激しさが増した。

「く、このっ……」

アルフのそこにはかつてはあったペニスの代わりに、女性の器官であるクリトリスが鎮

座していた。スーツはしゅるりとうねったかと思うと、急にクリトリスを痛烈に締め上げてきた。

「ひうつ、ああああっ!？」

ペニスを擦った時とは全く質の違う、重い快楽が響いてくる。

たまらず叫んでしまったアルフだが、その自分の声の蕩けように驚かされた。

「そこはっ、ああうつ!」

鋭い快熱に、ぴゅふりと秘部から熱い愛液が吹き出した。

「ふああ……! つは、ああ……んっ、ひうつ……!」

全身を締め付けられつつ、クリトリス先端をスーツにすりすりとおもたれられ、とても声が抑えられずその熱に没頭してしまう。

「違うっ、こ、こんなの私ではないっ……!!」

自慰をしていた時とは比較にならないほどの、未知の快感にアルフは戸惑う。何とか感じまいと歯を食いしばるが、直ぐにその忍耐も解けていく。

しゅるしゅるしゅるしゅる、と実は無機質ながらも不規則に猥動するスーツにしゃぶられる。

「んうつ!」

明らかに雌として感じるように、心身もろとも調教されている。そのことに気がついた彼は歯噛みする。

「その動きはダメだっ……やめろっ、その動き方は嫌だっ……!!」

優しく先端を撫で摩すり、ゾクゾクと這い昇ってくる快楽の電流が止められない。

初めて味わうクリトリスでの女としての快悦に、アルフは翻弄されるしかなかった。

「何なんだこれはあ……っ！」

アルフの股間から聞こえる衣擦れの音も、やがて粘着質な音が混ざり始めた。股を中心に小さくラバースーツは薄く灰色に湿っていて、カッと心地良さと羞恥で顔を真っ赤にする。

「き、気持ちよくっ……ひうんっ！ んっ、ふ……！！」

波立つスーツに責められている内にじわじわと、股の間の湿りは面積を広げていく。

嫌でも乳首と股間を刺激されて女のように感じていると認知させられ、あまりの羞恥と屈辱に歯の音が震えた。

「くうう……か、感じるものか……ここで落ちたら、奴らの思う壺だ……！ そう簡単に流されるか——んはあっ！ あっ、くそ……っ！」

優しく擦られたかと思えば、強く締められ揺さぶられる。びっしりと濡れたスーツでは、きつく絞られても快感しか生まれなかった。それどころかより密着してくることで、より喜悅は増してしまう。

「くうっ、あああ……！！ あ、それはっ……！！」

両乳首と膣口、クリトリスを波打つスーツに器用に挟み込まれ、背筋を激しく仰け反らせる。グチュグチュといやらしい音を秘部から響かせ、愛液を潤滑剤代わりにしながらスーツは責め込むのを続けた。

「ああっ！ あっ……んああっ！ んひっ……」

増えた愛液をスーツが吸収しきれず、それらがトロトロと股とスーツの間から滴り落ち

る。だから排水溝が設置されていたのかと、今更アルフは理解した。わかったところで、何かが変わる訳でもない。

「ひううっ!？」

濡れたスーツにクリトリスを強く摘みあげられ、グチュグチュと揺すられる。それは湿り気もあり人間の口内に吸引されているようで、錯乱した。

「んひいっ!! ひっ、やめっ……! やああっ……! こっ、擦るなあああ……!」

さらに強くきつくクリトリスを摩すり、隙間にまでぺったりと張り付き振動させてくる。元は伸び縮みに富んだ柔らかいスーツだと言うこともあり、多様な切り口で追い詰められていく。

(こ、こんなの知らない……!)

クリトリスを計算され尽くされた動きでスーツに絞られ、アルフは太ももを引き攣らせた。ここまで乱されるほど、女性のクリトリスは悦いものなのかとただただ驚かされる。このスーツは急速にクリトリスと乳首を開発し、性感帯へと仕上げていくことに特化している。

鋭すぎる快感に、さらにアルフの股から愛液が滲み出した。

「ひいひい……その動きやめろっ、あ、だ、だめだっ……! 止まれっ、もう止まれえっ!」

チカチカと、感じたことの無い快感に視界に星が散る。

激しさこそないが、時間をかけてアルフの肉体と精神に雌としての快楽を刻み込んでいく。

「んううっ！ うっ、ふううっ」

次第に速度も加速し始め、アルフの喘ぎ声がさらに大きくなる。無意識の内に身体は腰を振りたくり、追いかけてしまう。

うねり波打つスーツの蠢きは、人の指とは違って快楽を拾わせることだけを目的とした、完璧な力加減と角度だ。そんな計算され尽くされ、アウライ帝国の並外れた科学力の塊でもあるスーツに、アルフが敵うはずもない。

「はふっ、ふうう……！」

アルフは為す術なく、快楽に悶え喘ぐあえしか無かった。抗わなければという理性を置き去りに、身体は昇り詰めていく。

（来るっ……！ あ、上がってきて……っ）

腹の底から、急激に水位を上げて何かが迫る。

男だった時の絶頂とは違う、もっと重く響くようなそれだった。

来ては行けないものだと思し、衝動を懸命に押し込めようとすると、その踏ん張りもまた秘部をスーツに食い締められれば瓦解してしまう。細かくくすぐられ、目を見開いた。

「あああっ！ や、やめえっ……はふっ、ふううっ……！」

さらにただ蠢くだけではなく、スーツは波打ちを利用して多種多様なやり方で責め入ってくる。

「ひやああっ！ 擦るなっ、あひっ……！ ひいううっ！」

自動的にでこぼことスーツの内側を波打たせ、さらにその凹凸の生まれたそれでクリトリスと乳首を摩擦した。

クリュクリュクリュ、とクリトリスを磨くように扱かれて、思わず目を見開いた。

「くうっ！ うあああっ！ あはうっ、んふううっ！」

まるでブラッシングでもするかのように、波打つスーツは絶妙にゾリュツ、ゾリュツと自在に動いた。

ただ単に即座に絶頂させるような動きではなく、これが雌の快感だと覚え込ませるようにゆっくりと、彼の精神にクリトリスと乳首での悦を刷り込んで行く。

流されてはダメだとは頭では思いつつも、慣れず耐性のないその快感にアルフはどうしようもなかった。

「あああっ……！！ んっ、うう……！！！」

思わず理性もかなぐり捨てて浸りそうになり、慌ててアルフは首を振った。そこでスーツは、クリトリスだけでなく愛液で濡れそぼった秘部にも魔の手を伸ばす。

「ひううっ！！！」

小さく内側にスーツがへこんだかと思えば、それが愛液でドロドロのアルフの割れ目になぞる。

「ひやう……っ！ あ、だめ、だめ……ん、やうう……っ！？」

ちゅくり、と卑猥な水音が鳴る。秘所を伝った快悦の電流と熱い感覚に、アルフは甲高い声で悶えた。

「っあああ！ や、だめ……ひんっ！ どこを舐めてっ、や、そんなところ……はうううっ！ ふああっ、あっ」

愛液を吸って湿ったスーツがジュブジュブと蠢くのは、ねっとりと膣口を舐められてい

るようで、アルフは首を振って身悶える。

「ふあああ……！ やひっ、やめっ……！ だめだ、あっ……！ ひ、はひやううっ！」

速度を増すスーツに、アルフは高い声を上げて盛大によがる。

「んううううっ！ はふっ、うううう……！ ひやめっ、もう離してっ、ひやあああ……！ ふあっ、ああんっ……！……！」

ピンピンピン、とクリトリスを弾きながら、割れ目から滲む先走りを一滴も残さずスーツは吸い上げる。

「く、そ……ひやめっ、もうやめ、あっ、ふあああっ……！」

淫猥な音が響き、愛液が押し出されるようにして滲み出す。

濃密な溝をなぞるように舐め上げ、丁寧に吸い付いていく。

「あああああ……！ ひいん……！ ひうう、あ……この私がこんな声をつ……！」

スーツはクリトリスを押し込み、弾いてまたねっとりと沿うように舐め上げ虐め尽くす。まるで人間の舌で舐めるのを意識したかのような、動きだった。

「はひやううっ、や、ひゃんっ……！？ やっ、離せっ……！ おかしっ、おかひくなる……ひやうう……！」

アルフに出来ることと言えば、いやいやと子供のように髪を揺らして首を振るだけだ。なだれ込んでくる快感にただ翻弄され、両腿を痙攣させて喘ぎ震える。往復するスーツの舌がぴったりと一舐めする毎に、ひっきりなしに嬌声が漏れ出た。

「はっ、はひゅ……っ」

ずっと舐め上げられている内に、どうしてか触れられていない腔内の奥がキュンキュン

と疼いてうねり出す。

「あああつ、んはああ……!!」

ゾワゾワと猛烈な快感が堆積し、急速にアルフに絶頂が近づいてくる。

「ひぐつ、やうあああああつ……!!」

痺れるような快感に、アルフは腹部を痙攣させた。

(こっ、こんな……気持ちが良いものなのか……?)

初めてとはいえ、あまりに猛烈に脳を震わせるような快感にアルフは呆然とさせられる。スーツごときに好き勝手に開発されて翻弄され、よがらされているという悔しさはある。だがその考えをも、深過ぎる快感は溶かしていく。

「あつ、ふうう……そんなつ、気持ちよくない……!! なったら、いけないというのに……!!」

時間を掛けてこれが女の快感なのだと、スーツは強制的に手取り足取り享受きようじゆしてくる。挿入こそされないものの、蕩けきった秘部を淫猥いんわいな音を立ててマッサージされる。浅瀬を幾度も往復され、女としての熱に目覚めていく。

「ひあつ、んんう……っ!」

ぐるりと股間周りを余すことなく、揉みしだいた。

乳首も乳輪も締め上げ、ぷっくりと形の丸わかりになった乳にゆうしん芯を触れる布地で扱く。生き物のようでいて、人間には決して出来ない手技だった。

「いっ、いい加減にしろ……!! もうやめろっ!」

男としての快楽ならば、まだ我慢できた。だが雌としての快感など一切知らないアルフ

は、当然その熱にも慣れていない。耐性の無いアルフは、ただ喘ぐしかなかった。流される訳にも行かない。

そう精神を保とうにも、すぐに察知したらしいスーツが

スーツはアルフの感じるやり方と強さを瞬時に学習していき、巧妙に彼女を責め立てる。すぐには達しないように調節しつつ、じつくりとアルフの体を調教し、精神を煮込んでいく。

「あううっ！」

特にクリトリスへの責め苦は壮絶で、人間の口内に覆われているかのようだ。

昂っていた身体が、追い打ちを掛けられる。己の理性的な部分では嫌だと思いつつも、とても快感の奔流を抑えることは出来ない。

「ふあっ、あああああっ！くそっ、やめろおっ！」

乳首とクリトリスを揉まれながら転がされ、強く摩すられる。押し込んだり引き伸ばしたり、人に着られる為のスーツとは思えないほどの伸縮性と器用さを持って着実にアルフのクリトリスに責め入った。

また強く吸い上げられたかと思えば、ねっとり表面を優しく撫でられる。

「はあうう……うっ、ああんっ……！！！」

開いた唇から、甘い声を上げてしまう。陰唇いんしんから陰核いんかく、果てには後孔こうこうまで股間全体を吸いつかれながら、乳首も余すことなく揉み上げられる。

気付けばアルフは四つん這いになりながら、胸と尻を突き出した状態で腰を激しく振ってしまっていた。プライドも理性も手放して、スーツから与えられる悦に熱中する。

「イきつ、イきたくないいっ……！！！」

スーツもその期待に答えるべく、激烈に感じるところを擦り刺激していった。両乳首を揉み潰して膣内を舐め上げ、摘んだクリトリスをヌヂュヌヂュと磨く。

思わず後ろ向きに倒れそうになったアルフだったが、引き絞られたスーツがそれを食い止めてしまう。背筋をのけぞらせて天井を向いたまま、ビクビクと震え慄いた。

「あっ、はあああ……！！！だめだ、イクっ、来るっ……ひんっ！イきつ、イきたくないの……！！ひ、んふああああッ！あ、来るっ……！！！」

三点への同時の責め上げには、アルフも耐えられない。

水位が瀬戸際まで達した時、限界を迎えたアルフの肉体は激しい絶頂を迎えていた。

「んやああああああっ！」

自慰などとは比較にもならない、強烈な快樂の熱波が脳天を貫く。

「あっ……は、は、ふああ……」

果てた快樂に思考を一時的に飲み込まれたアルフは、恍惚とした顔を浮かべてしまう。

トロトロ……と大量の愛液が、アルフの股座から溢れた。いやらしく糸を引きながら、床へと落ちていく。



「あ……？」

痛みこそなかったが、絶頂の余韻に浸るアルフの脳にじわじわと何かが染み込んでいく。
「ふぁ、あ……あ、何、だ……」

その侵食が何なのかは分からず終いで、心身ともに限界だったアルフはぐったりとベッドに沈み目を閉じていた。

第三話 操られる肉体

「飛んだ誤算だ……」

アルフは大いに追い詰められていた。

（まさかこのスーツに、卑劣な仕掛けがあったとは……）

アルフはぴたりと張り付くスーツを、忌々しげに見下ろす。

どういう理屈で動いているかまでは解明出来ない。しかしこのスーツに面恥めんはじをかかせられただけでなく、あれから氣を失うように眠ってしまい、結局それによって脱走の計画を立てることは出来なかった。

（道理で一時間も休憩が用意されているわけだ……）

休憩なんて生ぬるいものではない、性器開発と捕虜に余計な体力を与えないことも目的としているのだろう。男性を少女にして調教師だけでなくスーツでも肉体を改造するという、抜け目ないアウライ帝国の計画には反吐が出る。

（く……！ あんな思いも経験も、もう二度としたくはないな……あの人としての尊厳もプライドも破壊するような真似は……！）

先ほどのことを思い出すだけで、震えが止まらなくなりそうになる。怯えるなど兵士として有るまじきことだったが、単純な拷問よりもあれはずっと恐ろしいものだった。体を作り変えられていくどころか、心もそれに引きずられていく恐怖。痛みよりも、ずっとアルフを不安にさせた。

眠りから目覚めたアルフは一応は脱走手段を画策してはいたのだが、有効的な方法を見出せずにいた。

あれから様々な目的で幾度か調教師や兵士に部屋から出され、その際に建物の構図を覚えるように場所を確認したものの、どこも警備は硬く、逃走の経路に使われそうなところは特に武装した見回りをしているのが確認出来た。

自室の扉だけでなく、別の建物と繋がる扉や、外へ出られるドアを開けるには必ずカードキーが必要で、逃亡の手段も潰されている。

注入されたナノマシンは今脳に存在しており、やがて浸蝕が進むごとに全身に巡るのだという。そうして最後には、身も心もアウライ帝国に染まる……吐き気を催すほどの事態だというのに、胸が暖かくなるような衝動が込み上げてくる。アルフはゾツとして頭を抱えた。

「違う！ 違う……アウライ帝国は敵だ！」

しかし脳の抵抗が薄れ始めて来ていることを、アルフは実感していた。これが浸蝕なのだろう。

これ以上、狂う前に、何としてでも逃げ延びる必要がある。

（どうする……）

カードキーさえあれば脱出の糸口は見えるだろう。しかし武装した兵士からどうやって奪えば良いのか。

「出ろ。身体測定の間だ」

「っ……」

急に扉が開き、ずかずかと踏み入ってきた調教師にアルフは飛び上がりそうになった。「分かり、ました……」

ゆらゆらと立ち上がり、調教師の後に続く。部屋の外には既に何人かのアウライ人の少女が待機していた。アルフが調教師の担当する少女の最後だったらしく、そのまま来い、という言葉と共にあるきはじめる。

ふとアルフは、目の前を歩く調教師をじっと見つめる。

（この男、銃は持っていないな……）

初めこそ調教師は拳銃を保持していたが、今は特に武器の類は保持していないように見受けられた。

調教師という立場もあり、武装を義務付けられていないのかもしれない。

ちやうど調教師は真横の囚人の少女に何かを命じており、背後もがら空きでこちらに意識を向ける様子も無かった。

（ここだ、今しかない……！）

好機だと理解したアルフは、その機会を見逃さない。

少女になったとはいえ、訓練学校で鍛えられた格闘センスは抜けきっていない。足を持ち上げ、全身の力を込めて首筋目掛けて振り下ろした。

「は……！？」

だが蹴りが首筋に直撃する寸前で、瞬時に囚人の方を向いたままの男の手がアルフの足首を掴む。

「どういことだ？ 089。この足はなんだ、答えろ」

咄嗟に男の手から足を引き剥がそうと何度か体を揺するが、がっしりと掴まれてとても払い除けられない。何より今の少女の膂力では、とても男の力に敵わなかった。

「どうやらまだ自分の立場が分かっているようだな……」

「外れない……！ この、離せっ！」

「最初から反抗的だとは思っていたが、まさかここまで愚かだったとはな……」

態度こそ冷静を装っているが、調教師は凄まじい怒気を放っている。凍てついた瞳でアルフを一瞥し、アルフを強く突き飛ばす。目にも止まらぬ早さで、よろめいたアルフの腕を捻り上げた。

「うぐっ……！ は、離せ……」

空いているもう片方の手を、首に当てる。

『俺を受け入れろ』

「は？」

抵抗を続けていた口と身体が、ピシリと固まる。

（なんの真似だ……？）

何事かと呆気にとられたアルフの唇に、調教師は無理やり口付けた。

「んんっ！？」

（何をする……！？）

アルフの身体は頭の中では暴れて調教師をぶん殴っていたが、実際は男に抱きついて自分から舌を伸ばしていた。

（なにが……っ）

男の唇に自分の唇を重ねれば、アルフの口内に調教師の舌が差し込まれ、中を暴くように蹂躪される。

「んむっ、む……んちゅっ…」

（あの命令か！なんてことをさせるんだ、くたばれクズ野郎がつ……！！）

アルフの身体も男の口の中に、舌を埋め込んでいた。歯列をなぞりながら口腔を舌先で舐り、熱い吐息を流し込んでしまう。勝手に動く舌から伝達される生暖かい感触に、アルフの肌は鳥肌立った。

「んんっ、む、んん……っ！」

（うっ……気持ち悪い……男とキスをするなんて……！）

ディープ過ぎるキスに上手く息を吸えずに酸欠になりかけるアルフに、調教師は巧みに舌先の力を弛めて息を吸わせる。だが呼吸を取り戻した途端にまた舌を突き入れてきた。逆らえないのの良いことにアルフの唇を貪り尽くし、濃密なキスを味合わせていく。抗いたいのに抗えない。支配されているのだと、調教師はアルフにその無力さを実践をもって分からせる。

「んっ、ちゅっ……ちゅくくっ……」

再び呼吸を奪うような深く熱烈なキスに、アルフは身悶えする。舌先を触れ合わせ、音を立てて幾度も口内を吸い上げる。唾液を絡めて蹂躪し、さらにアルフの口腔の奥まで犯し尽くした。

「んうう……はふっ、ちゅるるっ……」

（うぐっ……！！）

さらには調教師から唇と舌を伝って唾液の塊を送り込まれ、アルフは悪寒で粟立った。明らかに嫌がらせだ。

（吐き出せっ、こんなおぞましいもの！くうっ、身体が言うことを聞かない……！！）

アルフが命令に逆らえないことを理解して、彼女が最も苦しむ方法に打って出ている。事実、アルフはその唾液の塊を歓喜するかの如く飲み干していた。

それを舌先で確認した調教師も、目を笑みの形に吊り上げる。

舌が痺れてしまうほどに唇を重ね合わせたところで、ようやくと唾液の糸を引きながら調教師の口が離れた。

それと同時に命令も解除されたらしく、アルフは顔を顰めて口元をガシガシと拭う。

「けほっ、げほっ！死ねっ、ゴミクズがっ……！！」

激しい嫌悪感と吐き気を催しながら、アルフは調教師を罵倒する。怒りと憎悪の滲んだ瞳で睨みつけられ、その態度はより調教師の激情を駆り立てたらしい。

「ふん、この状況でもまだ逆らうのか」

「ぐ……当たり前だろう！誰が好き好んでこんな下劣なことをするか！」

それでも折れない気丈なアルフの態度に、調教師は征服欲と嗜虐心が刺激されるのを感じた。

「なるほどなあ。お前のことはよく分かった」

逃げようとするアルフの腰を左手でがっちり固定しながら、振り返った調教師は背後で困惑する少女たちに右手を振った。

「もういい、解散しろ。各自部屋へと戻れ」

「は、はい！」

「了解です！」

そう調教師が命じれば、他の囚人達は巻き込まれまいと慌てて逃げるように自室へと踵を返す。全員の姿が見えなくなったところで、またアルフに視線を戻した調教師は黒い笑みを浮かべた。

「さてと……来い」

「つつ……！」

調教師に腕を引っ張られ、アルフは近い部屋へと連行される。

てつきり怒り狂うものかと思ったが、激怒するどころか何故か笑い始める調教師に、アルフは余計に嫌な予感を感じた。

「お前ほど聞き分けのない奴は初めてだ。けどそれでこそ屈服させ甲斐があるってものだなあ」

「黙れ！ 気色の悪いことしやがって……許さないからな」

「馬鹿な奴だな。——命令だ。『両腕を頭の後ろで組んでそのベッドで寝転べ。その状態で、俺に向けて両足を開け』」

「っ貴様！！ あっ、うう……！！」

調教師の命令にカッとしたアルフだったが、身体は命令通りに動いていた。言われた通りに両腕を頭の後ろで組みながらベッドに横たわり、さらには自ら両足を大きく開脚する。精神は明け渡していないというのに、調教師に肉体の服従を誓う恥ずかしい格好に、アルフはプライドを傷つけられる。

「良い眺めじゃねえか。いつもこれくらい従順なら可愛いんだがなあ」

「く、見るな……！」

「さて、特別調教の時間だ。誰が上か、物分りの悪い生意気な雌にしっかりと分からせてやらないとな。089」

舌なめずりをした男は、楽しそうにあえて時間をかけて服を暴いていった。

アルフでは下ろせなかったジッパーを、調教師は難なく下まで引き下ろす。すると、小ぶりの胸がこぼれ落ちた。ニンマリと微笑んだ調教師は、乱暴な手つきと反してその胸を優しく一撫でする。

「うっ……！」

「休憩時間にこのスーツに、調教してもらったんだろ？ 知つての通り、こいつはただのスーツじゃねえからなあ……」

あの時の辱めを思い出し、アルフの顔が赤く染まる。

「その様子だと、すっかり自分の立場を教えられたようだな」

どうしてか、身体の自由は全く効かない。

いくら殴り飛ばそうとしても、腕も足も一ミリたりとも動かなかった。調教師が付けている首輪が原因なのは、明瞭だ。

原因は理解しつつも、どうにも自分の体だと言うのに動かないことが口惜しい。

（この身体が、女になってさえ居なければ……！）

男だった時の筋力と力があれば、こんな男など一撃で首を跳ね飛ばせるというのにと悔しがる。

「くうっ、ああっ……!!」

調教師の指が、アルフの桜色の乳首を摘む。何度か指と指の間ですり潰すように捏ねれば、小さな乳首は少しずつ膨らみ始めた。

「うあ、それっ……」

「こっちは正直みたいだなあ」

スーツにより乳首での刺激でも達したことを体は覚えており、そこを性感帯として認識していた。

甘い吐息が漏れてしまい、素直に感じる己の体を呪った。

前日にスーツに雌の悦楽を覚えさせられていたこともあり、身体はすんなりと快感を拾い始めてしまう。

「どうした？ 声が上がってるぞ」

「だ、黙れえっ……!!」

唯一、自由な声で抗うアルフだが、その声音には甘やかな色が混じっている。調教師はニヤニヤと笑みを深めて、空いた片手でアルフの腹を撫でた。大きく無骨な手のひらがさらに下がっていき、股の間へと到着する。

「んんっ！」

意図的に指がクリトリスを掠め、アルフは喉を震わせた。

「くっ、ふっ……!! ううっ！」

ぬるぬるともう濡れかけている膣口を、ねっとり指で辿られる。

「んんっ！」

直に指を二本挿入され、アルフは思わず肩を揺らした。

「どうした？ そんな耐えるような素振りを見せて。気持ち良いんだろうが、ほら。結局は俺には敵わないんだろう？ ほら、雌らしく声を出してみろよ。我慢しなくてもいいんだ。これは命令では無いからな」

ついこの間、女にされたばかりだと言うのに、男である心を押し退け、スーツでの調教を皮切りに着実に雌の快楽はアルフの肉体に定着していた。

（……はあっ、またこの感覚っ……！ くそっ、流されてたまるものか……！ 私には男だ……！）

調教師の指も単なる抜き差しではなく、ねっとりとかくまでアルフに快感を拾わせる律動でいやらしく責め立ててくる。膣内の勝手を知り尽くした動きだった。

（うっ、こ、こいつ……）

男の指が入ってくるのはこれが初めてだというのに、縮しながら根元まで指を受け入れてしまう。すぐに膣内は熱くなり始め、アルフの意思と反して濡れていった。

「ふーっ、ふーっ……」

味わったことの無い甘い電流が、体の芯から響いてくる。快楽がさざ波となって押し寄せてきて、喘ぎかけたアルフは慌てて唇を閉ざした。

「んっ……はっ、ふっ……！」

「嬉しそうに締め付けてきやがる。それにもう濡れてきたぞ。こんなに濡らして期待しているのか。いやらしい雌だな、お前は」

「うっ、うるさい……黙れ、そんなことある訳が無いだろうっ……！」

「どの口が言うんだか。そんな雌顔晒して言われても説得力ねえよ」

「くううっ！ふ、むうう……！！！」

ジュプツ、ジュプツとわざと音を立てて膣内をビストンされ、咄嗟に唇を噛んでいなければ感じ入った声を上げてしまいそうだった。

（耐えろ、耐えろっ……憎いアウライ人に隙を見せるくらいならば、死んだ方がマシだ……！！！）

スーツにまさぐられた時も耐え難い快感だったが、人間の手となるとその質は全く違うものだった。何より調教師もその名の通り、調教に関して人並外れた手技を有している。決して乱暴に動いて痛みを与えてくることはせず、くるくると一纏めにした二本の指で秘部を撫で摩りながら、浅瀬をなぞる。

「くふううっ！」

「ほら、もうぐちやぐちや音が鳴り始めた。最初から俺にこうされたくて反抗したのか？」

「んっ、は……そんな戯言っ……」

「お前はメスなんだ、メスじゃなきゃここで感じるか？心の底から拒んでるなら、善がり狂わねえだろうか？そんな虚勢を張っても意味ねえよ」

「ちがつ、違うっ……！！！」

それでもアルフは負けじと耐え忍び、調教師を罵倒する。

「この変態野郎がつ……逆らえないようにした相手にしか、偉ぶることしか出来ないのか？随分と悪趣味なことだな……！！！」

「チッ……黙れ、奴隷が俺に楯突くな。殴りたいのか？」

責める指を止めぬまま、調教師は額に青筋を立てる。

「笑わせるな、こんな捕虜一人好きに出来ないとは軟弱な奴だな」

「——命令だ。『俺を全肯定しろ。気持ち良い時は隠さずにしっかり喘げ。我慢は禁止だ。』
良いな？」

「は……!? つあああっ!?!」

煽るような笑みを浮かべたアルフだったが、舌打ち交じりの調教師の声に表情を一変させた。

心臓がドクリと波打ち、急速に肉体が変化を遂げていく。

「声がっ、あくっ! んああっ、ふあああああっ!?!」

命令が効いていることを確認するように、調教師はグチュグチュと太く長い三本目の指を突き立てる。

「ひうううっ!! やあっ……あふあああっ!?!」

愛液を巻き込みながら、膣内の壁を余すことなく愛撫する。途端に先程歯を食いしばっていたことが嘘のように、アルフは耐えることはせずに甲高い声で嬌声を上げた。

「素直になったじゃねえか」

「んっ、やうううっ……!」

嗜虐的に笑った調教師は、弱い所を指で擦る。

親指でクリトリスに優しく爪を立てられるだけで、先程まで喉奥に押し込んでいた喘ぎ声が強制的に引きずり出された。

「あっ、はっ……はひううっ!」

「だらしねえ顔しやがって、もつとして欲しいんだろ？ ん？」

「やめ——もつ、もつとくださいい……」

やめろと叫ぼうとしたアルフだったが、自分の意思とは全く違う言葉がひとりでに出て歯の音を震わせる。

（……め、命令か……！）

全肯定という男の命令が、自分の言葉に直接作用しているのだ。心では不本意とはいえ肯定するアルフに、調教師も満足したように耳元で囁く。

「ほう。結局はお前も抗えないんだなあ。とんだ淫らな雌だ」

「ひ、あ……そ、そうです……ん、気持ち良いです……っ！」

（くそっ、くそっ、くそおおっ……卑怯者が……！）

自分の口から言いたくもない言葉を強制的に引きずり出され、アルフは憎悪に駆られる。

「可愛い声で喘ぐようになったな。」

「気持ち良くて、腰が止まらないですう……ひゃうっ！」

肉体が悦くなってしまうているのは事実で、顔を真っ赤にして悔しがる。

「それなら聞いてやらないことはないなあ。こうやって浅瀬を指でグリグリされんのも好きなんだろ？ ん？」

「あはああっ！ 好きですっ、グリグリ好きですっ！」

（やめっ、やめろおお……！ 触るなっ、）

人並み外れた男の手技に、凄まじい快感で浮き上がった腰がビクビクと跳ねる。

「反省する気になったか？ 淫らな雌だと自覚したか」

（くそっ、下衆があ……！今すぐに死ね……っ！）

矜持を徹底的に痛めつけ、侮辱する内容にアルフは男を激情で滾らせた瞳で睥睨した。

「好きっ、好きです」

だが死ねと紡いだはずの唇は、命令によって勝手に愛の言葉へとすり変わる。

（くうう……！）

殺したいほど憎い相手に不本意とはいえ好きだと言わされ、怒りのあまり腸が煮えくり返りそうだった。

親指でクリトリスを潰され、さらには上下左右に動かして捏ね回す。スーツとは比較対象にすらならない、巧みすぎる男の指先に善がらされる。

「いい反応だ、特にここがイイんだろ？」

「ひんっ!？」

バラバラと挿入した指を腔内で攪乱されて、背中を反り返らせた。

「はいっ! ひゃひいいっ! すきっ、好きですっ! ひぐうっ! 気持ちいいですッッ! ふあああっ!」

グニグニとクリトリスを円を描くように揉まれて、舌を突き出す。

（声が止められない……! ここまで屈辱を感じたのは、初めてだ……!!）

こんな男に感じる姿を見せたくはないと思うも、刷り込みを受けた肉体は男が喜ぶ反応を見せる。矯正された言葉を吐き出した。

「ひゃあああっ! そこっ、そこ擦るの、ひゃううんっ! き、気持ちよすぎて壊れちゃいます……っ!」

「良いぜ、好きなだけ初めてでこれだけ感じるとは雌の才能があつたんだなあ」

あえてアルフのプライドを傷付けながら、指で濡れた膣内を掻き回す。また指は増やされており、実に四本もの指が我が物顔でアルフの秘部を暴き立てていた。

「んっ、く、ふうう……っ！」

ジュポッ、ジュポッと大きくなった水音が耳元で響いて

このままでは本当に雌にされてしまう。雌に作り替えられる。

（それは何としても阻止しなければ……！）

だが腹奥のざらついたところを指で撫でられ、アルフはひっと顔色を変える。

「わかりやすい反応しやがって。隠しても無駄だぜ？ ココがイイんだろう。あえて避けてやってたんだよ」

「ひうううっ！ あああっ！ んはあああっっ！」

このままイカされるのかと思つたところで、ようやく愛液だらけの調教師の指が抜かれていく。

「はーっ、はーっ……」

「こんなものか」

「んっ、くうう……」

やっとアルフは解放されながらも、中々快感の余波が引かず寝台の上でビクビクと身体を跳ね上げていた。かすかに開いた膣口からも、愛液が溢れているのが丸見えだ。絶頂こそ出来なかったが、男の前で指で無様にイカされるよりはずっと良かった。

「悪くない眺めだぜ」

そんな彼女を見下ろし、調教師は気を良くする。

「そんなお前にご褒美だ、マリオネッターの応用を教えてやるよ」

「んっ、はふ……何を……」

痙攣するアルフの痴態をたつぷりと眺めながら、調教師は嘲笑う。

「マリオネッターはな、よっぽど現実離れた事じゃなければなんでも可能にしてくれる
優れものなんだぜ？ 手本を見せてやるよ——『お前の脇はクリトリスと同じくらい感じる』」

「っ!？」

調教師がその言葉を呟いた途端ゾクゾク、と身体に形容しがたい電流が走る。特に脇を中心に痺れのようなものが訪れた。

「はっ……？ え……」

あっけに取られたアルフだったが、伸びてきた調教師の手が彼女の腕を掴んだ。その腕を持ち上げ、毛の無いアルフの脇筋をさらけ出す。

「何をしてるんで、す……くひいッ……!？」

笑いながら調教師は、脇下に顔を近づける。

「ひんっ、ああああっ!!」

調教師の舌がそこを這った刹那、アルフの脇を閃光が轟いた。脳天を直撃した途方もない快感に、嬌声がほとばしる。

「あ、ああっ……!？ はひっ、うううっ!」

一舐めされただけだというのにその快感たるや、体の震えが止まらないほどだ。大量の

蜜液が膣口から滴り落ち、何もされていないというのにきゅつと膣内が締まる。

「気持ちよすぎますっ……!!」

たかが脇だというのに、恐ろしいほどの気持ちよさにアルフは身を振った。それこそ、まるでクリトリスと脇がそのまま直結してしまったような感度だった。

「そうだろう？ んぢゅっ、たまらないだろう」

「やめっ、ひ……すごっ、凄いですっ！ おかしくなりますっ……!!」

実際は身体に染み込んだナノマシンが、脳にそう命令を送って認識させているだけだ。だがその絶対的効果によって、たまらなくアルフは感じていた。

「良い声だな、もっと聞かせろよ」

「んああああっ！ あふうつ、うううつ！」

「変態野郎と言ったな、脇で感じまくるお前は変態じゃねえのか？ どうなんだ」
調教師に笑われて、アルフは歯噛みする。



（悪趣味が……！）

調教師の力の込められた舌の先端は、ビクビクと弱い振動を伝えながら、軽く触れたりちゅぶ、と突ついたりを繰り返す。

「んむ、んん……」

単に舐めるだけでなく、なだらかに窪んだ脇をじゅううううと唾液を交えて吸い付いた。「ひゃっ、んううう……っ！」

あまりに強すぎる快樂に、アルフはプライドも投げうち泣き喘ぐ。頭の中で光がスパークし、何も考えられないほどの業火がアルフの精神を焼き焦がした。

だが、そんなアルフを嘲笑うように、調教師はゆっくりと汗ばんだアルフの脇を舐め回す。神経の塊の集中するようなそこへと、舌を分け入らせた。

「これはっ、っ……ひゃひんんっ！ひあっ、やひいいいっ……！」

腰が小刻みに揺れ、触れられてもいないむき出しの股間から多量の愛液が滲み出る。感じてるのは明らかだった。

それにしても許容量を超えるほどの悦樂に、アルフは動転する。

（せっ、せめて声っ、声だけはっ……！！）

声だけは聞かせまいと首を振って抗うも、命令を遂行する肉体は率直な喘ぎを調教師に聞かせてしまう。閉じられない口から嬌声を零した。

「じゅるるっ、じゅちゅっ……良い顔になってきたじゃねえか」

「ひやああ……ッ！あひ、んはあああっ……！」

（くそ、こんな……！一度ならず何度も醜態を晒すとは……っ！）

羞恥に塗れながらも聞かせたくもない、追い詰められている声を上げる。唇で摘まれながらくぼみを舌で上から下までなぞられ、吸い上げる。

（あああ！だめだ、だめだこれはっ！壊れる、狂うう……！！）

動きだけでも技巧じみているというのに、クリトリスと同等の性感になった脇にその責め苦は強烈すぎた。

（やめろっ、もうやめてくれ……！！嫌だっ、身体がおかしくなる……！！）

先程絶頂を寸止めさせられお預けを食らった分の快感も上乘せされて、アルフはじたばたと、快感の強さを全身で訴える。

（ああああっ！熱いのがっ、腹奥から上がってきて……来るっ、狂ううっ！！）
肉厚の熱い舌が、品のない音を立てて脇を舐めしゃぶる。

さらに空いた片方の脇には、調教師の指が滑り込まされた。もう片方の脇下も指がなぞるだけで腰砕けになるほどの激熱が生まれ、実質二倍になった快楽に絶叫する。

「んじゅっ、れろお……ちゆるるっ」

「やああああっ！イっ、イっちやいますううっ……！！」

背筋を折れんばかりに仰け反らせたアルフは、噴水の如くプシャプシャと愛液を何度も噴出させた。更に脇で絶頂させられ、誤作動を起こした肉体は愛液どころか激しく潮まで吹き上げていた。

「ああああああっ！？ あっ……は……は……は……ひっ……ひ……ひ……っ」

「ははっ、こいつは凄いな！飛んだ絶景じゃねえか」

初めての潮吹き感触とその凄まじすぎる熱悦の余韻に、うっとりとした顔を晒してし

もう。とうに心身ともに限界を迎えていた肉体は、そのまま込み上げてきた眠気には耐えられずに意識を失った。